



<巻頭言>

福祉の未来を拓く 社大福祉フォーラム 2021

2020年6月に開催予定であった「第59回日本社会事業大学社会福祉研究大会」は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止された。この研究大会の主催は、学校法人日本社会事業大学と日本社会事業大学社会福祉学会（学内学会）であるが、昨年度の学内学会中止は、卒業生はじめ多くの関係者に、学内学会の存在価値がいかに大きなものであったかを知らしめた。

2021年になってもコロナの感染状況の先行きは不透明であったが、かろうじて3月学位授与式と4月入学式は対面とオンラインの併用のハイブリッド方式で挙行できた。そうした不透明な視界の中で大会準備がなされ、今年度の社会福祉研究大会は6月26日（土）・27日（日）に学内学会初めてのオンラインでの開催となった。その大会名称は、昨年度中止されたときの「第59回日本社会事業大学社会福祉研究大会」を付した「福祉の未来を拓く 社大福祉フォーラム 2021」となり、大会テーマも昨年度と同じく「人に向きあうソーシャルワーク 一命の歎びと生への寄り添い」となった。

昨年度に大会テーマのもと基調講演なさる予定であった方が今年度はご都合がつかず、今年度大会の基調講演は、4月に学長に就任した私が務めることになった。大会テーマに副った内容で私が講演することは難しいこともあり、大会2日目に大会テーマのシンポジウムが組まれた。このシンポジウムでは、有村大士准教授が座長を務め、本学卒業生である福本麻紀氏・高橋亜美氏・岩田直子氏がシンポジストとして参加し、大会テーマについて3氏から各々の実践活動に基づくご報告がなされた。具体的には、岩田氏は筑波大学付属病院の周産期医療現場での「生をつなぐ支援」の実践を、福本氏は清瀬市のボランティアグループでの一市民としての当事者意識に基づく「居場所づくり」の実践を、高橋氏は児童養護施設等退所者のアフターケア相談所での「安心と楽しいを一緒に育む」随走型支援の実践を踏まえて、人に向きあうソーシャルワークについて各々の熱い言葉が語られた。

このシンポジウムが生き生きしたのは、各シンポジストの語る言葉もさることながら、学生幹事で本テーマの設定にも携わった在学生2名からの素晴らしい質問だった。つまり、男性目線で見たときの「生をつなぐ支援」や相談者側から見たときのソーシャルワーカーとの距離感などについての質問で、この質疑応答はオンラインを通じながら参加者一堂に、「命の歎びと生への寄り添い」を共にし「人に向きあうソーシャルワーク」の大切さを伝えてくれた。シンポジウム最後に、「心と心をつないで、…形として社会とつながっていく…プロセスを共に歩めるのがソーシャルワーク」（岩田氏）、「ソーシャルワークの価値を持った人がソーシャルワーカー」（福本氏）、「ソーシャルワークとは安心と楽しいを一緒に育む」（高橋氏）という言葉が発せられた。このシンポジウムを通して、在学生の皆さんや若い卒業生の皆さんが、シンポジストの3氏のように、相談者に寄り添いながら社会福祉の実践の場でソーシャルワークを先導することのできる「社会福祉のリーダー」として活躍して欲しいとの思いを強くした。





学内学会と本誌の意義は、全国に広がる全世代の卒業生と在学生と教職員と地域住民の一人ひとりが、日本社会事業大学という共通基盤のもとで学び合い究め合い語り合うことで、何か新しいものを創発する触媒になりうることや、未来につながるネットワークの結節点として大切な役割を果たしうることを、再確認できる機会を提供している点にある。

オンライン開催による今年度の学内学会は、対面での報告・討論や意見交換や懇親会ならば得られたであろう研究交流は実現できなかったが、遠方から参加する敷居を下げ、新たなバーチャル空間での研究交流の扉を開く「福祉の未来を拓く」第一歩になったと言えよう。この一歩が、次の記念すべき「第60回日本社会事業大学社会福祉研究大会」にどのような形で引き継がれるのか、楽しみである。

最後に、賛川信幸准教授の事務局長としてのご尽力と、関係者各位の多大なご支援とご厚情に感謝しつつ、新型コロナウイルスの感染拡大の一刻も早い鎮静化を心より願う次第である。

2022年1月

日本社会事業大学社会福祉学会会長

日本社会事業大学学長

横 山 彰

